

立命館大学／大学コンソーシアム京都 特殊講義（大学生協寄付講座）

2011 年度前期 金曜日 5 時限（18:20-19:50）

於・キャンパスプラザ京都

戦争と 平和を 問いなおす

この科目は受講生に対する知識の注入をおよそ目的としていない。教育とは知識の注入ではない。教育とは自らの生き方・世界観を絶えず吟味し変革していくプロセスであり、教師はその産婆である。この講義は学生諸君が自ら化学反応を起こすための触媒である。この講義が学生諸君の世界認識・自己変革の手助けとなることを切に願っている。また、学問とは常識批判である。学生諸君の「先入観を裏切る」講義をめざしている。

授業の概要

この科目は大学コンソーシアム京都に加盟する大学の1回生以上を対象とする平和学講義である。平和に関する思想は古くからあり、また哲学、政治学、法学などの諸学問が平和について考察することも古くからあるが、他の学問から区別される固有の学問として平和学が始まったのは1950年代の冷戦期である。平和学とは「戦争の原因と平和の条件を探究する学問」であるといわれる。平和学は米ソ核戦争による世界の破滅を防ぐための知的営為として始まった。1950年代に他の学問から区別される固有の学問として始まったとはいえ、平和学はさまざまな学問的方法を使う学際性を特徴としている。

この科目は、大学生協寄付講座である。大学生協からの寄付によって、全国から適任の講師を招くことが可能になった。毎週、講師を招いて、次のようなところに焦点を当てて、戦争と平和を問いなおしたいと思う。

まず現代世界をかたちづくったものとして、また平和学誕生のきっかけとして、第2次世界大戦——日本についていえばアジア太平洋戦争——がある。第2次世界大戦を特徴づける2つの側面に焦点を当てる。それは総力戦体制と強制収容所である。この講義では、日本の総力戦体制を芸術、とりわけ音楽の側面から考える（第2回）。

強制収容所には各種あるが——ナチスドイツのユダヤ人収容所、ソ連の強制収容所、米国の日系人収容所、日本軍がつくった強制収容所としての「慰安所」等々——、今年はシベリアの強制収容所での経験を深く見つめた日本の詩人について考えてみたい（第3回）。

アジア太平洋戦争の〈戦争体験〉と〈戦死者の記憶〉が戦後日本をつくったと小熊英二は述べている。この講義では、〈戦争体験〉が戦後日本においてどのように記憶され、議論されてきたのか考える。その際、『きけ わだつみのこえ』や戦没学生記念像〈きけ わだつみのこえ〉に言及することになるだろう（第4回）。

1945年、ロスアラモスで原爆を開発していた科学者たちは、原爆が国家主権の概念を根本的に変えることに気づいていた。核時代を切り拓いた科学者たちの世界秩序観は重要である。湯川とアインシュタインの平和思想を振り返り、現在の核軍縮の課題の検討につなげたい（第5回）。

戦後世界秩序はパックス・アメリカーナとあってよいが、パックス・アメリカーナの1つの要素は、現在、全世界に700以上存在している米軍基地である。日本では、戦前・戦中の沖縄差別の基礎のうえに、沖縄に米軍基地を押し付けてきた（故チャルマーズ・ジョンソンは沖縄を「アジア最後の植民地」と呼んだ）。〈沖縄問題〉に触れないわけにはいかない（第6回）。戦争と平和を問いなおすとき、ミリタリズムの暴力と家父長制の暴力をともに視野に入れる必要がある。ジェンダーと平和に関する考察は必要不可欠である（第7回）。

最新の戦争論／平和論——たとえば、2001年に発表された『保護責任』報告書（人道的介入論）——の中にも、中世以来のキリスト教正戦論が流れ込んでいる。現代において戦争と平和について考えるとき、ユダヤ・キリスト教の——さらにはイスラム教の——戦争論／平和論を知っている必要があるだろう（第8回）。

現在の戦争——対テロ戦争——の特徴は、戦時と平時の区別の消滅、戦争と平和の融合、＜例外状態＞の恒常化である。この問題を検討する（第9回）。

戦争の起源を知ることが戦争を克服するために有益である。その点で、＜戦争の考古学＞や＜戦争の人類学＞は有意義である。それと同時に、現在、＜平和の人類学＞の試みがある（第10回）。

冷戦後・政権交代後＝55年体制の完全な終焉後の現在、そして9/11後の現在、平和教育を再構築することは急務であると思われる。そのために、戦後日本の平和教育の展開を的確にとらえることが必要であろう（第11回）。

広島・長崎の原爆体験を思想化することは、われわれの任務であると思われるが、長崎にあって哲学することから生まれた「平和責任」の概念について考えてみたい（第12回）。

この科目は大学生協寄付講座であるので、協同組合運動や大学生協の観点から、賀川豊彦と平和運動について（第13回）、京都における大学生協の平和学習活動について（第14回）も検討を加えたいと思う。

最初の第1回と最後の第15回は、君島が担当して、講義の全体をまとめる。

平和学は知識を獲得して終わる学問ではない。平和学とは、自分自身の生き方を変革し、世界を平和的に変革するプロジェクトである。この科目の履修を終えた学生諸君が、このプロジェクトに参加することを切望している。平和学が発展するばかりで、世界が平和にならないのでは意味がない。世界の暴力を少しずつ克服するために、この科目が何らかの役に立つならば、担当者としてうれしく思う。

到達目標

- ・アジア太平洋戦争が提起する諸問題——総力戦体制、学徒出陣、沖縄戦、原爆体験、シベリア抑留等々——を理解している。
- ・核兵器出現後の戦後世界秩序——日本国憲法9条も含まれる——について理解している。
- ・ジェンダーと平和（ミリタリズムの暴力と家父長制の暴力）について理解している。
- ・戦後日本における＜戦争体験＞のとらえ方——平和教育も含まれる——について理解している。
- ・戦争と平和の融合としての9/11後の世界について理解している。
- ・平和をつくるための概念、理論、運動について理解している。

成績評価

レポートを4回提出してもらい、それらにもとづいて成績評価する。レポート提出締切は、第1回5月6日、第2回6月10日、第3回7月1日、第4回7月29日である。

それぞれ、教室での直接提出のみ受け付ける。

授業スケジュール

4月8日 第1回 君島東彦（立命館大学国際関係学部教授）

「戦争と平和を問いなおす——平和学講座をはじめる」

平和学はどのようにして始まったか、平和学の特徴は何か、いま世界の平和学はどのような状況か等について述べたのち、「特殊講義（戦争と平和を問いなおす）」の趣旨、全体構成について説明する。



4月15日 第2回 高岡裕之（関西学院大学文学部教授）

「文化人のアジア太平洋戦争——総力戦下の政治と文化」

日中戦争の長期化により成立した総力戦体制では、文化の役割が重視され、文化に対する統制と組織的動員が目指された。しかしそこでは、文化に対する統制・弾圧が強化される一方、少なからぬ文化人の体制への積極的参加もみられた。本講では、音楽や映画・演劇などいくつかの文化領域の事例を取り上げることにより、決して一様ではない総力戦と文化の関係について考えてみたい。

※戸ノ下達也先生は、東北関東大震災の影響により講義へ来れなくなりました。



4月22日 第3回 畑谷史代（信濃毎日新聞論説委員）

「詩人・石原吉郎を読む——シベリア抑留者がとらえた戦争と人間」

石原吉郎（1915-77年）という詩人がいる。8年間のシベリア抑留から復員後、体験を基にしたエッセーを書き残している。それは「戦後」社会を生きる日本人へのメッセージでもあった。石原は強制収容所での自らの体験と向き合ううちに、戦争や強制収容所を生み出す存在としての「人間」について、問い詰めていく。その軌跡をたどり、戦争と人間について考え、いまを生きる私たちへの問いかけを探る。



5月6日 第4回 福間良明（立命館大学産業社会学部准教授）

「<戦争体験>の戦後史——断絶の変容と『きけわだつみのこえ』」

戦没学徒の遺稿集『きけわだつみのこえ』は1949年の刊行以来、長きにわたって読み継がれ、今日では「戦争体験の古典」とも言うべき書となっている。だが、この手記集は戦後一貫してそうした評価がなされてきたわけではない。批判的な評価もかつては少なからず見られた。この回では、この書物をめぐる社会的評価の変遷を跡付けながら、戦争体験論の戦後史を概観する。そのうえで、「戦争体験の断絶」がいかにかに生起し、また変容したのか、そこにいかなる立論の可能性や問題点があったのかを考えたい。



5月13日 第5回 田中正（京都大学名誉教授）

「湯川秀樹とアインシュタイン——2人の科学者の平和思想」

20世紀は戦争と科学の世紀であったといわれる。そして今日、現代の科学技術革命を足場に加速するグローバリゼーション、超不安定競争格差社会、「金融の暴走」、地球環境問題、核兵器とともに果てしなく進む「軍事革命 RMA」等々、人類は核時代の新たな危機に直面している。この講義では、君島教授との対談を交えて、戦争と科学の世紀を真っ向から生きた湯川秀樹とアインシュタインの足跡をたどり、変貌する核時代の背景と「科学者の平和思想」に迫りたい。



5月20日 第6回 松島泰勝（龍谷大学経済学部教授）

「<沖縄問題>とは何か——沖縄に対する構造的差別について考える」

2010年、米軍基地の県外移設を沖縄人の前で約束した鳩山首相が辞任するまでの普天間基地を巡る混乱で明らかになったのは、ほとんどの日本国民は米軍基地を本土に受け入れず、沖縄を犠牲にして「本土の平和と繁栄」を享受しようと考えていることであった。本講義では「沖縄問題」とは「沖縄差別問題」であり、沖縄に対する差別は構造的、歴史的なものであることを示し、差別から解放される方法について論じたい。



5月27日 第7回 若尾典子（佛教大学社会福祉学部教授）

「ジェンダーと平和」

いま家族関係に生じる暴力が注目されている。それに対する取組みとして、児童虐待防止法（2000年）、DV防止法（2001年）、高齢者虐待防止法（2005年）が成立した。なぜ、いま、新たな法律が必要なのか。いまになって家族が危機に陥り、暴力・虐待が増えたためだろうか。家族の暴力性を告発する女性たちの取組みを通して、「ジェンダーに敏感な視点」から平和の構築を考えたい。



6月10日 第8回 小原克博（同志社大学神学部教授）

「一神教の戦争論と平和論」

ユダヤ教・キリスト教・イスラームは同じ伝統に立つ兄弟宗教であるが、長い共存の歴史と共に軋轢や紛争の経験も有している。もともと絶対平和主義をかかげていたキリスト教の中から、正戦論や聖戦論が現れてきたのはなぜなのか。9/11テロ事件以降、世界の各地でイスラーム勢力が紛争の原因としてクローズアップされているが、蔓延するイスラモフォビア（イスラーム嫌悪感情）を克服して、新たな共存を探ることは可能なのか。一神教文明の成立プロセスを俯瞰しながら、これらの問題を論じていく。



6月17日 第9回 岡本篤尚（神戸学院大学大学院実務法学研究科教授）

「対テロ戦争の時代——境界なき戦争、戦争と平和の融合」

この講義では、9/11以後の世界を覆っている「対テロ戦争」の特徴について、主権国家間で戦われる伝統的な戦争と比較しながら検討する。特に、「対テロ戦争」の最大の特徴が、戦争と平和が区別しうることを前提とする伝統的な戦争と平和のパラダイムを転換させ、戦争と平和という状態、戦時と平時という時間、戦場と日常生活の場という空間を区分する「境界」の消滅した「戦争と平和の融合状態」を出現させた点にあることを検証する。

6月24日 第10回 小田博志（北海道大学大学院文学研究科准教授）

「〈平和の人類学〉の可能性」

この回では平和に関して新しい視点を提起したい。そしてこの〈平和の人類学〉の可能性を論じたい。キーワードは平和の（1）実践、（2）資源、（3）関係性、（3）インフォーマルな平和である。（1）平和を静止状態ではなく、実践（「平和する」）として捉えるとどうか。（2）平和するために役立つ「資源」とは何か。暴力と戦争の道具は「武器」と呼ばれるが、平和の道具とはいかなるものか。（3）平和を他者との関係性として捉えると何がみえてくるか。（4）日常や地域で実践される小文字の、インフォーマルな平和にはどのような意義があるか。



7月1日 第11回 村上登司文（京都教育大学教授）

「平和教育のこれまでとこれから」

戦後日本の平和教育の展開を社会的に見ていく。日本の戦争体験が集団的記憶として日本人に共有され、戦争を忌避し平和を志向する態度をつくってきた。戦後65年が過ぎた現在では、「積極的平和」を実現する平和教育が求められており、平和で民主的な社会をつくる主体者を育てることが重要な目的である。平和教育研究をガイド役として、平和構築に役立つ平和教育の進め方を明らかにする。



7月8日 第12回 高橋眞司（長崎大学生涯学習教育研究センター客員教授）

「平和責任——長崎で考える」

わたしは長崎で被爆者について学び、核時代について考え、「長崎にあって哲学する」という思想的営為をつづけてきた。西暦2000年、新しい千年紀（第三千年紀）にのぞんで、過去に関わりながらも未来を切り拓いてゆく新しい思想が何としても必要であった。そうして行き着いたのが「平和責任」（peace responsibility）という新しい概念であった。この「平和責任」について長崎で考える、というのがわたしの講義のねらいである。



7月15日 第13回 名和又介（同志社大学教授）

「賀川豊彦と平和運動」

賀川豊彦は20歳から神戸のスラム街で献身した人物であり、いわば日本のマザーテレサにあたる。弱者救済のため、労働運動・農民運動・協同組合運動・災害救助活動などに従事した。その延長として平和運動にも貢献し、日本人で初めてノーベル平和賞にノミネートされた。この講義では、受講生とともに賀川の諸活動と平和運動について考えてみたいと思う。



7月22日 第14回 横山治生（大学生協京滋・奈良ブロック事務局長）

「大学生協の平和学習活動——Peace Now 舞鶴の取り組みから」

舞鶴は明治の頃より海軍鎮守府がおかれ軍港都市として「栄え」てきた街である。敗戦後は中国やシベリアからの引き揚げ者の受入れ港として、「岸壁の母」の歌詞にみられるような人生のドラマが繰り返されてきた所である。舞鶴には日本海側の唯一の海上自衛隊基地もあり、現在もその役割は変わっていない。京都の大学生協は毎年、舞鶴を平和学習のフィールドとして訪問してきた。大学生協がなぜ平和のことを考えるのか、舞鶴を通して戦争の姿と現在の平和について一緒に考えてみたい。



7月29日 第15回 君島東彦（立命館大学）

「『しない』平和主義と『する』平和主義——平和学講座を締めくくる」

戦後の日本人が平和について考えるとき、あるいは平和の実現をめざすとき、日本国憲法の平和主義は重要な拠り所であった。この講義では、日本国憲法の平和主義——前文、9条、24条——を多角的に、的確にとらえたのち、われわれ日本の市民が、平和、つまり日本と東アジアの安全、世界各地の武力紛争・人道的危機の克服を実現するためにとりうる方法、とるべき方法——日本国憲法の平和主義に適合的な方法——について考える。



教科書：特に指定しない。

参考書：『平和学を学ぶ人のために』君島東彦編、世界思想社、2009年

- 『アジア・太平洋戦争——シリーズ日本近現代史(6)』吉田裕、岩波新書、2007年
- 『音楽を動員せよ——統制と娯楽の十五年戦争』戸ノ下達也、青弓社、2008年
- 『シベリア抑留とは何だったのか——詩人・石原吉郎のみちのり』畑谷史代、岩波ジュニア新書、2009年
- 『石原吉郎詩文集』石原吉郎、講談社文芸文庫、2005年
- 『「戦争体験」の戦後史——世代・教養・イデオロギー』福間良明、中公新書、2009年
- 『戦記と周縁——沖縄・広島・長崎に映る戦後』福間良明、新曜社、2011年刊行予定
- 『湯川秀樹著作集4 科学文明と創造性』湯川秀樹、岩波書店、1989年
- 『湯川秀樹著作集5 平和への希求』湯川秀樹、岩波書店、1989年
- 『アインシュタイン平和書簡(1-3)』ネーサン&ノーデン編・金子敏男訳、みすず書房、1974-77年
- 『湯川秀樹とアインシュタイン——戦争と科学の世紀を生きた科学者の平和思想』田中正、岩波書店、2008年
- 『琉球の「自治」』松島泰勝、藤原書店、2006年
- 『島嶼沖縄の内発的発展』西川潤・松島泰勝・本浜秀彦編、藤原書店、2010年
- 『ジェンダーの憲法学』若尾典子、家族社、2005年
- 『女性の身体と人権』若尾典子、学陽書房、2005年
- 『ジェンダーと社会理論』江原由美子・山崎敬一編、有斐閣、2006年
- 『宗教のポリテイクス——日本社会と一神教世界の邂逅』小原克博、晃洋書房、2010年
- 『原理主義から世界の動きが見える——キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像』小原克博・中田考・手島勲矢、PHP研究所、2006年
- 『マルチチュード(上)——〈帝国〉時代の戦争と民主主義』アントニオ・ネグリ/マイケル・ハート、日本放送出版協会、2005年、特に「第一部 戦争」
- 『例外状態』ジョルジョ・アガンベン、未来社、2007年
- 『《安全》のための戦争——浸蝕する予防原則と溶解する『境界』』岡本篤尚著、『現代憲法における安全——比較憲法学的研究をふまえて』森英樹編、日本評論社、2009年、26-71頁
- 『未開の戦争、現代の戦争』栗本英世、岩波書店、1999年
- 『真の独立への道』M.K. ガーンディー・田中敏雄訳、岩波文庫、2001年
- 『いま平和とは何か』藤原修・岡本三夫編、法律文化社、2004年
- 『戦後日本の平和教育の社会学的研究』村上登司文、学術出版会、2009年
- 『続・長崎にあって哲学する——原爆死から平和責任へ』高橋眞司、北樹出版、2004年
- 『ナガサキから平和学する!』高橋眞司・舟越耿一編、法律文化社、2009年
- 『賀川豊彦』隅谷三喜男、岩波書店、1995年
- 『大江山鉦山——中国人拉致・強制労働の真実』和久田薫、ウインかもがわ、2006年
- 『浮島丸事件の記録』浮島丸殉難者追悼実行委員会、かもがわ出版、1989年
- 『非武装のPKO——NGO非暴力平和隊の理念と活動』君島東彦編、明石書店、2008年

以上